

厚生労働科学研究費補助金  
新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業  
子宮頸がんワクチン接種後に生じた症状に関する治療法の確立と情報提供についての研究  
平成 29 年度 分担研究報告書

子宮頸がんワクチン接種後に神経症状を呈した患者の当院における診察状況

研究分担者 桑原 聡 千葉大学医学部神経内科 教授

研究要旨

子宮頸がんワクチン接種後に脳神経障害を呈し当院を受診した患者について、診察・検査による評価および治療の現状を検討した。体位性起立頻拍症候群と高次機能検査、脳血流SPECTでの血流異常を比較的高頻度に認め、一部の症例で治療前後の変化を認めた。これらの所見が病態を反映しているかについて、同年代の正常対照および疾患対照との比較検討が必要である。

A. 研究目的

子宮頸がんワクチン接種後にみられる神経障害は、症状が多彩かつ経過が長期にわたること、脳MRI異常、血清学的異常などの検査所見に乏しいことが、病態の把握をより困難なものにしている。子宮頸がんワクチン接種後に神経障害を呈した患者を自律神経機能、高次脳機能の面から評価するとともに、治療の現状と反応性について検討する。

B. 研究方法

2015年3月から2017年12月に、子宮頸がんワクチン接種後の多彩な症状を主訴に当科を受診した20名の患者のうち、他疾患が疑われた4名を除いた16名において、以下の各種検査を行った。

- 身体診察
- 生理学的検査：自律神経機能検査・神経伝導検査・痛み関連SEPなど
- 画像検査：脳MRI、脳血流SPECT(IMP-SPECT)
- 高次脳機能検査：WAIS-

また8症例では免疫学的治療（血液浄化法、免疫グロブリン療法）を行い、うち5症例で治療後に再度評価を行った。

（倫理面への配慮）

個人情報に関する厳重な配慮を行った。人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に基づき、当該研究についてホームページ上で公開し、研究を行った。

C. 研究結果

初診時年齢は、中央値 18 歳（範囲 16-21 歳）、初回ワクチン接種から症状出現まで中央値 14 ヶ月（範囲 0-46 ヶ月）であった。訴えた症状の内訳は、広範な疼痛（頭痛・四肢痛・移動性

の関節痛）が 11 例、易疲労・倦怠感が 9 例、睡眠障害および不随意運動がそれぞれ 8 例、学習障害が 7 例であった。

自律神経機能検査では、体位性起立頻拍症候群を 12 例中 4 例で、皮膚温低下と起立性低血圧をそれぞれ 2 例認めた。高次脳機能検査では 9 例中 7 例で処理速度の低下を認めた。脳 SPECT では 11 例中 10 例で血流低下が疑われたが、血流低下部位に一定の傾向は認められなかった。

免疫治療を行ない再評価しえた 5 例のうち、3 例で免疫治療後に何らかの症状改善があり、SPECT の脳血流低下の改善傾向が認められた。

D. 考察

子宮頸がんワクチン接種後に神経障害を呈する患者において脳血流低下、高次脳機能障害、自律神経機能異常を示唆する所見が認められ、一部は免疫治療後に変化が認められた。これらの所見が病態を反映しているかについては、同年代の正常対照および疾患対照との比較検討が必要である。

E. 結論

子宮頸がんワクチン接種に疼痛、高次脳機能障害を呈する患者には脳血流低下、高次機能障害、自律神経機能異常が存在する可能性がある。今後同年代の正常対照との比較検討を要する。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

特記すべきことなし

H. 知的財産権の出願・登録状況

特記すべきことなし